

琉球大学学術リポジトリ

循環型社会の形成に向けた大学生の意識と行動： 衣服の取得から手放しについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2016-08-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 國吉, 真哉, 與儀, 春佳, Kuniyoshi, Sanechika, Yogi, Haruka メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/35070

循環型社会の形成に向けた大学生の意識と行動

—衣服の取得から手放しについて—

國吉真哉¹⁾ 與儀春佳²⁾

The Consciousness and behavior of university students for the establishment of environmental society - For the disposal from obtaining clothing -

Sanechika KUNIYOSHI, Haruka YOGI

1. はじめに

家庭から出る廃棄物の中の「資源ごみ」には、瓶・缶・ペットボトル・古紙・草木・古着類等がある。古着等の繊維リサイクルに着目すると、その現状について山田（2002）は、排出量の面では衣料品だけで年間約100万トン排出されていることを明らかにしており、これは、容器包装、紙製品、自動車よりは少ないものの、家電製品や大型家具とほぼ等しく、重量ベースで一般廃棄物全体の約2%を占めているとしている。また、近年の繊維製品の低価格化の進展に伴って、製品の使い捨て傾向が強まるなど製品のライフサイクルの短期化が進んだり、輸入品の急増等に伴う供給過剰により売れ残り品が増加している懸念等もあることから、廃棄物量の更なる増加が引き起こされている可能性も指摘している。環境省（2007）が2000年に制定した「循環型社会形成推進基本法」においても、3Rを推進することにより、環境への負荷の少ない持続的発展可能な社会を構築できると述べている。今後、自治体や生活者が中心となった循環型社会の形成にむけた取り組みが期待される所であり、現に那覇市（2011）における平成21年度の資源ごみ量は、瓶類が約78,000トン、草木が約2,700トン、古紙類が約1,600トン、ペットボトルが約830トン、缶類が約800ト

ン、古着類が約280トン回収され、資源物としての有効利用も着実に行われているが、燃焼ゴミとして出された古着等はそのまま焼却処分されている現状があるのも事実である。

田中他（2010）は、古着における循環型社会を目指した有効的な利用方法の事例を調査し、日本での古着に対する価値観の変動や廃棄物量と資源化物量の比較から、資源化される廃棄物量の少なさ、繊維製品ならではの循環されにくい要因などを情報収集する過程で整理し明らかにしている。また、小澤他（2001）は、シミなどのスポット汚れに着目し、これが原因で衣服の死蔵や廃棄につながる現状について意識調査を通して分析している。その結果、スポット汚れの処理に伴い発生する事故が死蔵・廃棄される割合は、中高年女性の方が女子学生と比較して高いことを明らかにしている。

衣生活を中心とした循環型社会の構築を考えた場合、廃棄の問題だけでなく、住まいの中での衣服の死蔵化についても着目する必要がある。藤原他（1989）の死蔵被服に関する研究では、資源に恵まれていない我が国では、省資源・省エネルギーを積極的に推進する必要があると述べており、その為には、流行遅れや体型に合わなくなった、似

1) 琉球大学教育学部

2) NPO 法人珊瑚舎スコーレ結塾 J&S

合わなくなったなどを理由に死蔵、又は廃棄されることになる衣服を生活資源として円滑に循環させていく必要があると述べ、その課題として、他者の古着着用に対する態度の変容がない限り、死蔵被服流通の振興は難しいとしている。

循環型社会の形成に向けた大学生の意識に関する研究についてみると、林(2008)は、女子大学生を対象にリサイクル意識の調査を通して、衣服の購入時において「デザイン・品質」は「価格」「環境配慮」に対して優先されている品質重視志向であることを明らかにしている。また、リサイクルシステムを理解することが環境を考慮した実践を促し、逆にシステムに対する理解が曖昧または低いと、リサイクル意欲が低下することが明らかにされている。さらに、山田他(2004)は、古着の所持に着目して衣服のリサイクルについて大学生の男女を対象に、衣服を処分する際のリサイクルと利用する際のリサイクルの二つの視点から見て実態を調査し、古着の所持に影響を与える関連性の考察を行っている。

これら一連の先行研究の多くは示唆に富むものであるが、衣服の循環型社会の形成に向けた課題を明らかにしていくためには、衣服の取得から手入れ・補修、保管、再利用または廃棄といった手放しまでの一連の流れとしての衣服管理について生活者の意識や行動を明らかにすることが必要であると思われる。

そこで、本稿では大学生を対象とした意向調査により、衣服の取得から手放しまでの過程に関する大学生の意識と行動について明らかにし、大学生が環境に配慮した生活を送る上での衣生活に関する課題を考察し、循環型社会の形成に向けて主体的に行動する生活者として、衣生活をより豊かに送ることができるための基礎資料を得ることを目的とする。

II. 意向調査の概要

1. 意向調査の対象者および調査方法

意向調査は、琉球大学に通う大学生を対象に行った。アンケート調査対象者に、衣生活に対する意識と行動に関する意向調査票を配布し、記入後に直接調査票を回収した。また、直接回収が難

しい場合は、研究室前に設けた意向調査回収ボックスへ提出してもらう形で実施した。

意向調査は、平成23年11月14日から12月7日までの24日間で実施し、配布部数は126部で、回収部数は101部、有効回収数は101部となり、有効回収率は80.2%であった。

2. 調査対象者の属性

1) 基本属性

有効回答者101人中、女性が61.4%、男性が38.6%と女性の割合が高い結果となった(表1)。学年別では、1年次27.7%、2年次23.8%、3年次26.7%、4年次21.8%の内訳となった。

出身地については、沖縄県内が79.2%、沖縄県外が20.8%であった。また、居住形態については、家族と同居が68.3%と圧倒的に多く、次いで一人暮らしが27.7%、その他が4.0%であった。

表1 調査対象者の基本属性

項目		人数(人)	割合(%)
性別	男性	39	38.6
	女性	62	61.4
学年	一年次	28	27.7
	二年次	24	23.8
	三年次	27	26.7
	四年次	22	21.8
出身地	県内	80	79.2
	県外	21	20.8
居住形態	家族と同居	69	68.3
	一人暮らし	28	27.7
	その他	4	4.0

2) 所持衣服・所持死蔵衣服・所持古着について

大学生の所持衣服、所持死蔵衣服・所持古着の枚数については、以下の表2～表4に示す通りであった。尚、表中のスカート及びワンピースについては、女子のみを母数として集計している。

まず、所持衣服の枚数については(表2)、スカート、ワンピース、トレーナー・パーカー・セーター類、Yシャツ、ジャケット・上着類は0～5枚が最も多くなっている。パンツ・ジーパン・短パン類とTシャツ・タンクトップについては6～10

表2 所持衣服の枚数

衣服の種類		0～5枚	6～10枚	11～15枚	16～20枚	21～25枚	26～30枚	31枚以上	合計
パンツ・ジーンズ・短パン	人数(人)	20	45	19	5	4	3	4	100
	割合(%)	20.0	45.0	19.0	5.0	4.0	3.0	4.0	100.0
スカート	人数(人)	45	12	2	1			1	61
	割合(%)	73.8	19.7	3.3	1.6			1.6	100.0
ワンピース	人数(人)	43	12	4	1			1	61
	割合(%)	70.5	19.7	6.6	1.6			1.6	100.0
Tシャツ・タンクトップ	人数(人)	5	31	27	15	10	7	5	100
	割合(%)	5.0	31.0	27.0	15.0	10.0	7.0	5.0	100.0
トレーナー・パーカー・セーター類	人数(人)	46	40	10	1	2	1		100
	割合(%)	46.0	40.0	10.0	1.0	2.0	1.0		100.0
Yシャツ	人数(人)	67	28	4			1		100
	割合(%)	67.0	28.0	4.0			1.0		100.0
ジャケット・上着類	人数(人)	49	42	5	3	1			100
	割合(%)	49.0	42.0	5.0	3.0	1.0			100.0

表3 死蔵衣服の所持枚数

衣服の種類		0～5枚	6～10枚	11～15枚	16～20枚	21枚以上	合計
パンツ・ジーンズ・短パン	人数(人)	83	11	3			97
	割合(%)	85.6	11.3	3.1			100.0
スカート	人数(人)	56	4				60
	割合(%)	93.3	6.7				100.0
ワンピース	人数(人)	59	1				60
	割合(%)	98.3	1.7				100.0
Tシャツ・タンクトップ	人数(人)	64	20	10	1		95
	割合(%)	67.4	21.1	10.5	1.1		100.0
トレーナー・パーカー・セーター類	人数(人)	88	8				96
	割合(%)	91.7	8.3				100.0
Yシャツ	人数(人)	96					96
	割合(%)	100.0					100.0
ジャケット・上着類	人数(人)	92	4				96
	割合(%)	95.8	4.2				100.0

表4 古着の所持枚数

衣服の種類		0～5枚	6～10枚	11～15枚	16～20枚	21枚以上	合計
パンツ・ジーンズ・短パン	人数(人)	75	10			2	87
	割合(%)	86.2	11.5			2.3	100.0
スカート	人数(人)	51		1			52
	割合(%)	98.1		1.9			100.0
ワンピース	人数(人)	48	3	1			52
	割合(%)	92.3	5.8	1.9			100.0
Tシャツ・タンクトップ	人数(人)	73	8	2	1	3	87
	割合(%)	83.9	9.2	2.3	1.1	3.4	100.0
トレーナー・パーカー・セーター類	人数(人)	83	3	1			87
	割合(%)	95.4	3.4	1.1			100.0
Yシャツ	人数(人)	83	4				87
	割合(%)	95.4	4.6				100.0
ジャケット・上着類	人数(人)	81	6				87
	割合(%)	93.1	6.9				100.0

枚が最も多く、中には 50 枚以上所持している学生もあり、所持衣服の数量に幅がみられる。

大学生の死蔵衣服の所持枚数については（表 3）、すべての服種が 0～5 枚が最も多く、死蔵衣服の数量は少ない結果であった。しかし、パンツ・ジーパン・短パン類については 11～15 枚、Tシャツ・タンクトップについては 16～20 枚と比較的多くの死蔵衣服量を保有している状況が確認できた。

古着の所持枚数についても（表 4）、すべての服種で 0～5 枚の所持が最も多いが、パンツ・ジーパン・短パン類や Tシャツ・タンクトップは 21 枚以上所持している学生もあり、服種によっては古着を積極的に利用している学生もいることが確認できた。

III. 衣服の取得から手ばなしに関する意識と行動

1. 衣服の取得について

1) 新品衣服の取得について

新品の衣服の取得方法については（図 1）、「店で購入」が最も多く、年間平均 12.0 枚であった。次いで多い「インターネットで購入」の 1.6 枚と比較しても、店で衣服を購入することが多い状況が確認できた。しかし、「インターネットで購入」の内訳をみると、0 枚が 66.3%（75 人）に対して、5～15 枚が全体の 19.8%（20 人）を占めており、インターネットでの購入は二分化の傾向にあることがわかる。

衣服を購入する際の優先事項については（図 2）、ほぼ全員が「デザイン（96.0%）」と「値段（93.1%）」をあげており、次いで「色合い（63.4%）」「機能性（41.6%）」が続いている。現在の大学生は、「ブランド（24.8%）」や「流行（20.8%）」よりも自身に合った衣服を選択していることがうかがえる。一方、「長く着尽くせる（39.6%）」は約 4 割の学生が意識しているものの、「環境を考慮した素材（1.0%）」や「廃棄に困らない（0.0%）」と意識は皆無に近い。

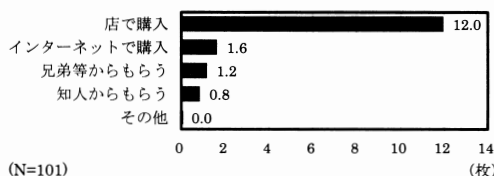


図 1 新品衣服の取得方法と年間平均取得枚数

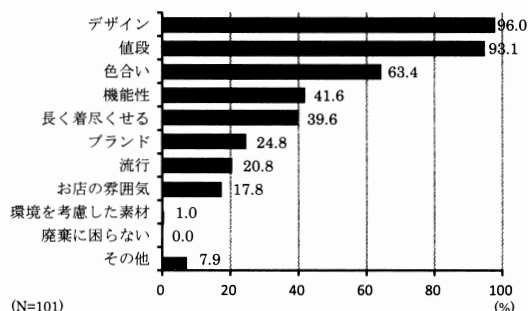


図 2 衣服を購入する際の優先事項（複数回答）

2) 古着の取得について

古着に対するイメージについては（図 3）、「新品にはない味がある（46.5%）」や「使い回せて環境的に良い（41.4%）」のイメージが高く、比較的肯定的に捉えていることがわかる。一方、「必ず洗濯してから着たい（41.4%）」、「ほつれ等が気になる（25.3%）」、および「においが嫌だ（22.2%）」が次いでおり、否定的なイメージを抱いている学生もいることがわかる。「その他」の内容としては、安いが多く上げられていた。

古着の入手方法と年間平均取得枚数については（図 4）、「店で購入」が 2.8 枚と最も多く、「兄弟等からもらう」「知人からもらう」と続いている。しかし、平均取得枚数は 0.7～1.0 枚であり、店での購入の 1/3 程度にすぎない。学生にとって古着の取得は店での購入が一般化しているようである。

古着を購入する際の優先事項については（図 5）、8 割以上の学生が「デザイン（87.0%）」と「値段（85.7%）」をあげ、「色合い（50.6%）」「機能性（33.8%）」と続いている。これらの項目は、基本的に新品の衣服購入の優先事項と同様で、学

生の衣服購入の選択基準に大差はないことがわかる。

古着を購入する際のメリットについては（図6）、88.8%の学生が「安い」をあげており、低価格であることが重視されていることがわかる。また、約半数の学生が「珍しいアイテムがある（53.8%）」や「おしゃれの幅が広がる（41.3%）」をメリットとして考えている。一方、「使い回せて環境に良い」は23.8%にすぎず、古着の利用を生活環境の改善につなげる取り組みとしての意識は低いこともわかる。

古着を購入する際のデメリットについては（図7）、6割以上の学生が「ほつれや型くずれ（67.0%）」、「色あせ（62.8%）」をあげている。また、古着は1品物が多いため、「サイズが合わない（48.9%）」をあげる学生も約半数近くいることがわかる。「その他」の具体的な内容をみると、「独特なおい」「古着なのに値段が高い」「返品交換できない」「自分の持っている服と合わせにくい」などの問題に加え、「気持ち的に嫌」など心理的に拒否反応を示す学生もいた。

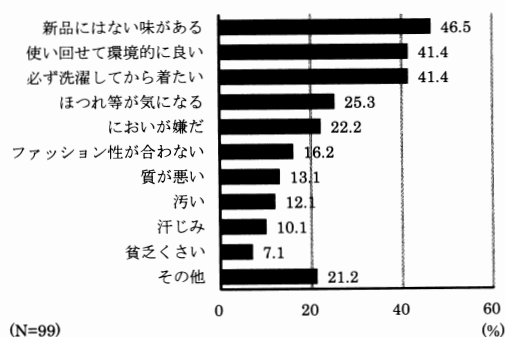


図3 古着に対するイメージ（複数回答）

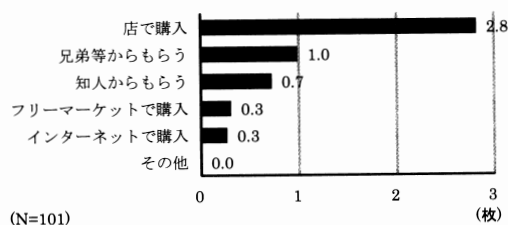


図4 古着の取得方法と年間平均取得枚数

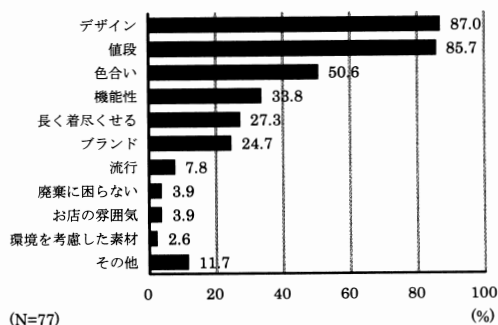


図5 古着を購入する際の優先事項（複数回答）

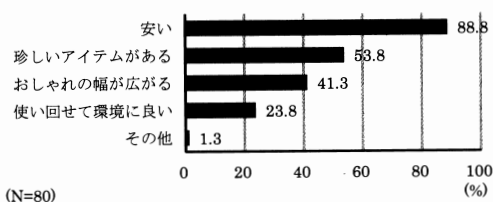


図6 古着購入のメリット（複数回答）

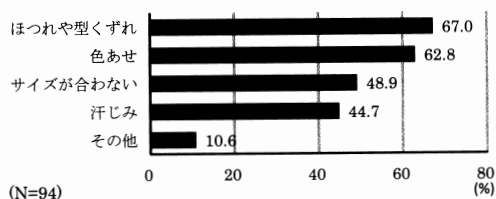


図7 古着購入のデメリット（複数回答）

2. 衣服の手入れと補修について

1) 衣服の洗濯と保管の方法について

衣服を洗濯する際に気を付けていることについては（図8）、半数以上の学生が「洗濯ネットに入れる（68.4%）」「手洗いが必要なものは手洗する（52.0%）」「洗剤は適量を入れる（51.0%）」を実践していることがわかる。一方、「表示に合わせて洗う（24.5%）」や「素材別に洗う（22.4%）」を実践している学生は少なく、衣服のダメージにつながりかねない状況も確認できた。

衣服の保管の際に気を付けていることとして（図9）、「洗濯しきれいな状態にする（80.0%）」や「しわにならないように畳む（58.0%）」については多くの学生が実践しているが、「しっかり乾かす（45.0%）」ことを実践している学生は半数以下であり、においの原因につながる保管の

実態が確認できる。また、「防虫剤を使う」「防湿剤を使う」「換気する」などの実践はさらに低く、学生の衣服の保管に対する意識が低いことがうかがえる。

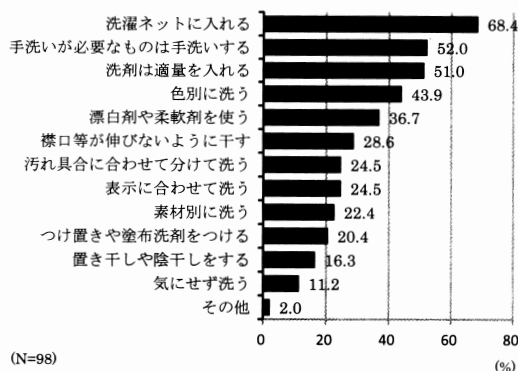


図 8 洗濯時の配慮事項 (複数回答)

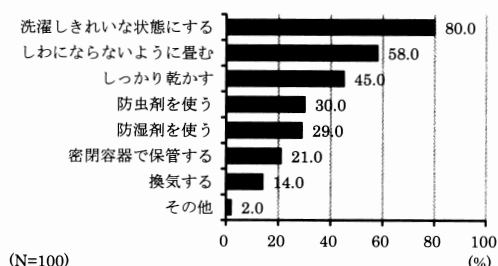


図 9 衣服保管の配慮事項 (複数回答)

2) 衣服の補修について

衣服にシミがついてしまった場合の対応について (図 10)、「適切な方法はわからないが対応している (57.0%)」が最も多く、次いで「適切な方法がわからないので対応できない (24.0%)」であり、適切な対応の仕方を十分把握していない状況が確認でき、また、誤った対応をするとシミを広げてしまう可能性もある。実際に「適切な方法がわかり対応している」は 17.0%に過ぎず、家庭科教育の視点から見ても知識や技術が生活の中で定着していないことを課題として認識する必要がある。

衣服のほつれや付属品が取れたりした場合の対応については (図 11)、「時間があるときに自分で直すようにしている (47.3%)」が最も多く、次いで「気がついたときに自分で直すようにして

いる (18.7%)」となっており、6 割以上の学生が自身で手直ししている状況が確認できた。一方で、「そのまま着続けることが多い (11.0%)」学生や、中には「面倒なので廃棄する (1.1%)」学生も少数であるがおり、循環型社会の形成の視点からも知識と技術の定着に向けた取り組みが求められる。

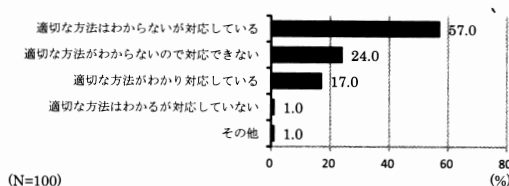


図 10 衣服のシミにあった適切な対応 (複数回答)

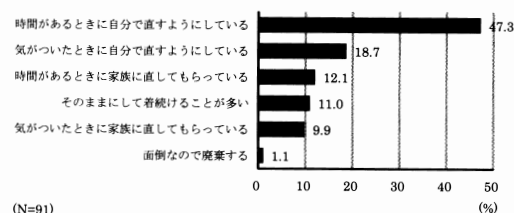


図 11 衣服のほつれ等への対応 (複数回答)

3) 衣服の死蔵化について

衣服を死蔵する主な原因については (図 12)、「サイズが合わなくなった (43.0%)」が最も多く、物理的に着用できなくなったことによる死蔵化が多いことがわかる。次いで「流行遅れ (40.0%)」「似合わなくなった (39.0%)」「着飽きた (36.0%)」といった心理的な理由によるものが多く、「色あせした (36.0%)」「汚れた (31.0%)」「破れた (25.0%)」「縮んだ (23.0%)」「型くずれした (20.0%)」などの衣服の劣化による死蔵化も比較的少ないが確認することができた。

衣服を死蔵する主な理由については (図 13)、「なんとなく置いている (69.7%)」や「捨てるのが面倒だから (44.4%)」という無意識な理由が多いことがわかる。一方、「流行が再来してまた着るかもしれない (23.2%)」という理由で保管している衣服が、そのまま死蔵化している状況もみられ、着用可能な衣服が死蔵されていることも確認できた。また、「誰かに譲りたいが相手が

いない (16.2%)」「売りたいが方法が分からない (7.1%)」「何かに作り変えたいが方法が分からない (7.1%)」といった学生も少数ではあるがおり、生活者が主体となることができる多様な衣服の有効活用方法を伝えていく必要がある。

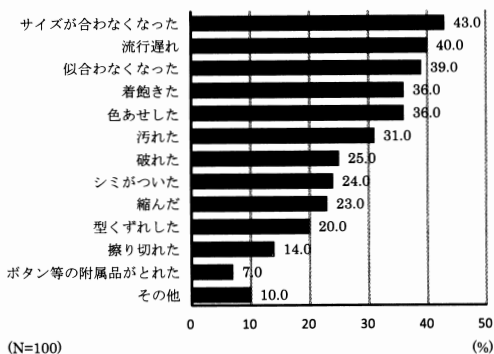


図 12 衣服を死蔵する主な原因 (複数回答)

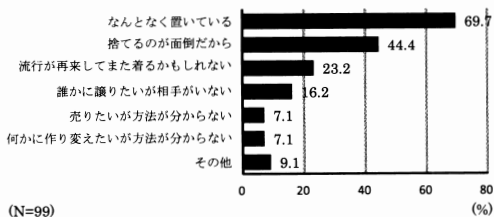


図 13 衣服を死蔵する主な理由 (複数回答)

3. 衣服の手放しについて

1) 衣服の手放し方について

衣服を手放す主な原因については (図 14)、「サイズが合わなくなった (56.4%)」をあげた学生が最も多く、死蔵化の原因と同様であることがわかる。次いで多い原因は「色あせした (42.6%)」「破れた (41.6%)」の衣服の劣化が続いている。死蔵の原因で上位にあった「似合わなくなった (40.6%)」「着飽きた (40.6%)」などの心理的な理由によるものは少し順位を下げているものの、全体としては上衣の 6 項目に大きな変動はなく、一度死蔵化された衣服がそのまま有効利用されず手放されている可能性が高いと思われる。

衣服を手放す主な理由については (図 15)、「有効利用する具体的な方法が分からない (48.5%)」や「捨てる以外の方法を思いつかない (32.7%)」が上位の理由としてあげられており、衣服の有効

利用の様々な方法について情報提供していく必要があると思われる。また、「服が傷みすぎて有効利用できない (44.6%)」も半数近く上っており、衣服の手入れの仕方も課題としてあげられよう。

不用となった衣服を有効利用する場合どのような取り組みをするかについては (図 16)、「兄弟・親戚へ譲る (59.6%)」が半数以上を占めており、次いで「古着屋に売る (43.8%)」「友人へ譲る (27.1%)」となっている。先述した古着の入手方法と年間平均取得枚数の結果では、対象大学生のほとんどが古着の入手先として圧倒的に店での購入が多かったが、自身の衣服を手放す際には、兄弟・親戚などへ譲る方向にあることが確認できた。

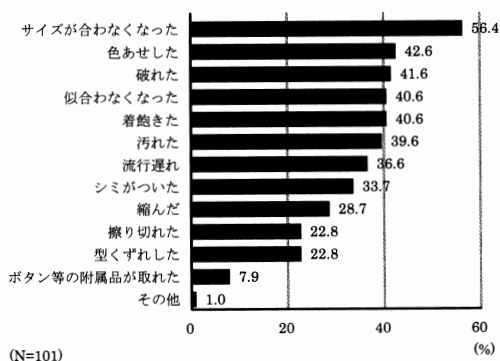


図 14 衣服を手ばなす主な原因 (複数回答)

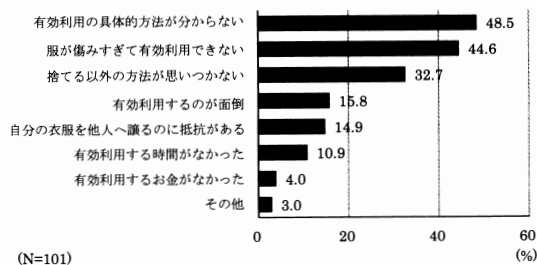


図 15 衣服を手ばなす主な理由 (複数回答)

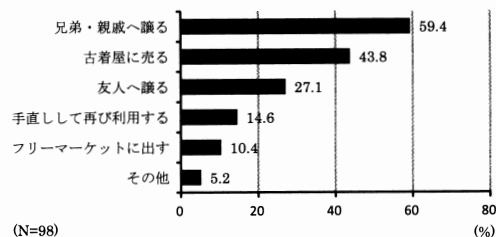


図 16 不用な衣服の有効利用 (複数回答)

IV. 循環型社会形成に向けて

衣服の取得から手放しに関する大学生への意向調査の結果より、家庭科教育の視点から循環型社会の形成に向けた課題を考察する。

衣服の取得に関して、現在のところ新品衣服の取得については店頭での購入が多いが、今後インターネットを介した購入の増加が推察され、デザインや品質表示等をしっかりと確認して購入することが求められる。とりわけサイズについては、衣服の死蔵化や手放しの原因として最も高いことから、試着のできないネット購入ではサイズ確認をより注意して行い購入する必要がある。また、ネット購入に関する消費生活上の課題も多く指摘されていることから、情報リテラシー教育も大切である。

衣服の手入れと補修に関しては、まず、衣服の洗濯において、取扱説明表示等の表示に合わせて洗う学生の割合が低く、衣服のダメージにつながりかねない状況にあったことから、適切な洗濯方法の知識と技術の習得が求められる。また、衣服の保管についても適切に管理できていない状況にあった。さらに、衣服の補修についてもシミやほつれなどに対する適切な対処方法に課題がみられた。こうした内容は高等学校の家庭科教育までで既習してきた内容でもあることから、循環型社会の形成の上でも生活の中で確実に定着させていくことができるよう授業の改善が求められる。

衣服の死蔵化の原因は、サイズに関する物理的な理由に加え、心理的な理由や衣服の劣化によることが確認できた。物理的な理由については難しいものの、心理的理由や衣服の劣化に関することについては、購入時の衣服の選択や手入れや補修などを徹底して行うことで改善できる内容が多く含まれている。基礎的基本的な知識および技術の習得の重要性が再確認できよう。

衣服の手放しに関しては、手放しの理由が死蔵化の理由と同じであることが明らかになったように、一度死蔵化された衣服がそのまま有効利用されることなく手放していくことになっていることから、衣服の死蔵化を減少させていくことが重要

となる。また、手放しに際して資源の有効利用の多様な方法があること等についても、授業などを通して情報提供していく必要があると思われる。

環境を考慮した循環型社会形成に向けた取り組みを行うには、高等学校学習指導要領解説（2010）にあるように、衣・食・住の生活場面に置いて環境と密接に関連しており、また消費生活でも、大量生産、大量消費、大量廃棄が繰り返される消費社会の現状から、持続可能な消費の重要性を理解した上で、生活の中で主体的に取り組めるような意識づけが重要である。衣生活の領域においては、衣服の購入から手入れ・補修、そして手放しに至る一通りの流れの中で学ぶことが重要となり、かつ、日常生活における定着につなげていくための授業づくりが求められよう。

参考・引用文献

- 藤原康晴, 所康子, 川端澄子. 死蔵被服に関する意識と実態—阪神地域に在住する女性の場合—. 日本家政学会誌, 1986, vol.40, no.7, 641-646
- 林隆紀. 衣服に関するリサイクル意識と行動. 佛教大学社会学部論集, 2008, no.46, 1-16
- 環境省. 我が国の循環型社会づくりを支える技術—3R・廃棄物処理技術の発展と変遷—. 環境循環型社会白書（平成19年版）, 2007, 51
- 文部科学省. 高等学校学習指導要領解説家庭編. 開隆堂, 2010, 32-33
- 那覇市環境部クリーン推進課. 平成22年度那覇市資源化物（有価物）参考試料, 2011
- 小澤玲子, 新井理恵, 石川ひとみ, 瀬戸山望, 高橋志帆, 藤井薫, 片山倫子. 衣服の廃棄要因としてのスポット汚れ—その現状と対応—. 日本家政学会誌, 2001, vol.52, no.6, 523-531
- 田中美智, 小林智慧, 千代田仁. 持続可能な社会における“古着”の役割に関する考察. 川村学園女子大学研究紀要, 2010, vol.21, no.2, 69-89
- 山田剛士. リサイクルに関する国の施策と繊維リサイクルの方向性. 繊維機械学会誌, 2002, vol.55, no.2, 1-9
- 山田由佳子, 西澤陽子, 重田美智子. 大学生の衣服リサイクルに関する意識と実態—古着の入手に着目して—. 大阪教育大学紀要 第II部門, 2004, vol.52, no.2, 49-62